

日時：平成 23 年 10 月 11 日(火) 14：00～16：30 会場：半田市民交流センター ホール
参加者：50 名（NPO 関係 29、行政 8、市民 4、学校関係 4、コミュニティ 2、社協 2、企業 1）

■交流会

愛知県社会活動推進課 田中

『あいち協働ルールブック 2004』は、NPO と行政の協働促進に向けて、2004 年 5 月に NPO と行政の協働ルールとして愛知県が発行。県が 2004 年から協働ロードマップを作成している。『協働ロードマップ』とは、すべての公共を行政が担い切れず、県と NPO との共通の同意や、対等な立場の確認をするために作成。県の決定事項を委託するだけでは足りなく、どの事業が効果的かを考える時点から NPO や市民が必要ではないかということになり、決定したその方針を紙ベースにしたものが、本日の講演資料のネットワークの部分にあたる。

岡本

「多世代交流」にテーマを絞り、事前に話し合う協議の場の参加者を選出した。参加者以外の方の意見を公聴したいと考えており、興味のある方とプロセスの共有をしながら進め、今年度中に作りたい。松下さんへの質問や、思っていること等を兼ね、自己紹介をしていただきたい。

協議の場参加者の自己紹介

エンド・ゴール 落合

主に 20、30 代の若者を対象にした支援、キャリア教育や就労をサポートしている。半田市民交流センター 1 階にサポートステーションがあり、気軽に相談できる窓口になっている。ひきこもりや発達障害等、発達過程でのつまづき等複雑な問題が背景にはある。家族や地域と話し合いながら、この絡み合った問題を解決していきたい。若者支援だが、多世代での協議を進めて行きたい。

こころとまなびどっとこむ 岩田

事務局は名古屋駅裏にある。地域は違うが、5、6 年前にサポートちたに出逢い、知多地域の動きに惹かれた。今年の 4 月 16 日に 3 者合同（こころ、エンドゴール、サポちた）で子ども若者支援フォーラムを開催した。学齢期（小・中・高校生）の問題に取り組み、その進路支援もしている。多くの子が心に傷を負い、自己否定感が大きくみられる。子供がのびのびと、元気に明るく暮らせるにはどうすればいいか。ひきこもり、就労、子育て等理念の違いがある機関同士が力を合わせ、行政の協力も得ながら、地域力をアップさせたい。

りんりん 下村

「困ったときはお互い様」を合言葉に 17 年ほど経った。2000 年の介護保険導入を機に高齢者を対象とした支援が増えた。4 年前より学童保育や産褥期支援、学童期の支援に取り組むようになり、子育ても課題につながっていると実感。4 人に 1 人の超高齢化社会を支えていく子ども若者の現状は、複雑な支援も増え危険感を覚える。日々の積み重ねの中からできる「支え合い」を作ることが必要。

知多メディアネットワーク 鈴木

他の参加者とは違う立場で参加。知多地域 3 局で地域の活動を広報する番組「ちたはんトーク」を制作している。以前の取材の中で NPO を知り、地域のつながり、経験、マネジメント等の情熱を伝えたいという想いがあるが、市民にはこういった動きは知られていない。これまで蓄積したものが形になろうとしている時代の転換期かと思う。それも市民に伝えられたらと思っている。

半田市地域福祉課 畑中

主に障がい者サービス支給が担当業務。地域福祉課では、高齢者や障がい者の手帳申請等福祉サービス担当と、半田市地域福祉計画の推進を進めている地域福祉サービス担当がある。今回地域福祉課代表として、日々業務の窓口の実情を協議の場に出したい。

愛知県県民生活部社会活動推進課青少年グループ 伊藤

若者支援、子ども支援、地域の支え合いづくりに協力したい。協働ロードマップづくりに意見を出していければと思っている。

ボランティアネイバーズ 三島

名古屋に事務局があり、あいち福祉ネットの事務局運営もしている。小規模多機能を地域の人たちの活躍の場にしたいと思うが、経営が成り立つのか？課題として、経営が可能なやり方を考えて行きたい。

半田市社会福祉協議会 まちづくりひろば 前山

松下さんの話を聞いて、社協はもっとしっかりしないといけないと思った。国土交通省の補助金で交流の場「おっかわハウス」を今年 5 月に本格稼働させ、多世代、共生型の居場所づくりを進めている。中日新聞の記事参照（配布）。

NPO 法人ゆめじろう 出口

NPO として地域の中でグループ活動してきたのは、障がいのある方の地域づくり。計画を作るとき、任意団体の声が非常に小さいと感じた。第 3 者や若者も入れ、古い仕組みはそのまま既存の団体を作り直すことも必要。

NPO 法人 スマイリードリーム 櫻井

子育て中の女性参画を支援をしている。子どもが学齢期になると母親が仕事をし始めるためメンバーが減少し、後継者の継続が難しい。高齢化にはスポットが当たりやすくて、30~40 代の子育て期の女性にはスポットが当たりづらいため、意見を出していきたい。

NPO 法人もやい 岡戸

阿久比町では、社協が地域の 2, 3 か所でサロンを月 1 回開催しているが、運営は進みにくい現状がある。もやいの居場所では、高齢者がサービスを一方的に受けるのではなく、地域貢献する場として、また地域の子どもの育成を地域の大人で支える場として活用している。単世帯夫婦の 2 人目出産時に、夜中一人目の子どもを預かるなど、多種多様な助け合いをしている。

岡本

4 月 16 日子ども若者支援のためのフォーラムをしてから、月 1 回継続して話し合いを行なっている。そこに参加されている方からも話を伺いたい。

KTC 高等学園 鈴木

主に不登校やひきこもりの経験のある子が通う学校の教員をしている。その背景には家庭や地域の問題が絡んでおり、子どもたちの成長を阻んでいる。お互い支えあう地域が必要と思う。

大府市社会福祉協議会 渡辺

地域助け合い推進が仕事。大府市でも居場所の拡充し続けている。大府市では 10 ある自治区を繋ぎながら居場所作りをおこなった。各地区へ広めていきたいと考えているが、2 番手になる人はいても、1 番手で「やります」と言ってくれる人がなかなかいない。「みんなに来て欲しい」と思うが、若い人は食事には来てくれても、居場所の利用は少ない。若い人と一緒に展開していくことが難しく、今後の課題である。

岡本

松下さんの話にあったように、居場所とは「私の」役所であり、市民の 1 人 1 人のプライベートに向き合い、個人のつぶやきや個人の情熱を大事にできる場が必要と思う。

松下

地域みんなは共通の想いだけど、立場が違うのでアクションが違う。それをまとめ、情報発信する場とコーディネーターが必要。市民協働コーディネーターが市民活動をプロデュース、コーディネートし、課題解決や新しいものを作り出すためにもリーダー育成が必要。テーマ毎の分野が繋がることで、地域がよくなると確信する。